

七騎落

ツレ 源頼朝

同（一同） 從騎五人

シテ 土肥実平

子方 同遠平

ワキ 和田義盛

狂言 船頭

地は 船中

季は 雑

一 同次第

「身は捨小舟うらみても。く。かひなきや憂き世なるらん。

頼朝詞

「是は兵衛佐頼朝とは我事なり。さても昨日石橋山の合戦に味方うち負け。余りに無勢に候ふ程に。一先安房上総の方へ開かばやと存じ候。如何に土肥の次郎。

シテ詞

「御前に候。

頼朝

「余りに味方無勢にある間。一先安房上総の方へ開

かうずるにて有るぞ。急いで舟の事を申し付け候へ。

シテ

「畏つて候。疾くより御舟の事を申し付けて候。急いで召されうずるにて候。

頼朝

「いかに実平。

シテ

「御前に候。

頼朝

「唯今船中に供したる人数は如何程あるぞ。

シテ

「さん候只七騎御坐候。

頼朝

「さては頼朝までは八騎よな。急度思ひ出だしたる事有り。祖父為義鎮西へ開きし時も主従八騎。父義朝江州へ落ち給ひしも主従八騎。思へば不吉の例なり。実平はからひて舟より一人おろし候へ。

シテ

「畏つて候。実平おほせ承り。舟のせがひに立ち上り。御供の人数を見渡せば。まづ一番には田代殿。

地

「さて二番には新開の次郎。

シテ

「又三番には土屋の三郎。

地

「四番は土佐坊五番には。

シテ

「実平候六番には。

遠平

「同じき遠平。

シテ

「艦板には。

義実

「義実あり。

地

「此人々は君の為め。く。龍門原上の土に。屍をば曝すとも。惜しかるまじき命かな。いづれを撰び出ださんと。さしもの実平思ひかね。赤面した

るばかりなり。く。

頼朝詞

「如何に実平。何とて遅きぞ急いでおろし候へ。」

シテ詞

「畏つて候。如何に岡崎殿に申し候。急いで御舟より御おり候へ。」

義実

「何と某に御舟より下りよと候ふや。」

シテ

「中々の事。」

義実

「暫く。此御供の内に。某一の老体にて候ふ程に。かひぐしく御用にも立つまじき者と御覧じ限ら

れて。かやうに承り候ふな。其儀に於ては御舟よりは下り候ふまじ。

シテ

「いやく左様の儀にては無く候。艫板に召されて候ふ程に。陸の近さに申し候ふ。」

義実

「いや所詮此船中に。命二つ持ちたらんずる者を御船より下され候へ。」

シテ

「是は不思議なる事を承り候ふ物かな。それ人は生ずるより死するまで。命をば一つこそ持ちて候へ。」

二つ持ちたる謂の候ふか。

義実

「さん候某も昨日までは命を二つ持ちて候ふを。早
一つの命をば我君に参らせ上げて候。

シテ

「さて其謂は候。

義実

「其事にて候。昨日石橋山の合戦に。子にて候ふ真
田の与一義忠は。副將軍を賜はり。俣野と組んで
討たれぬ。されば親子は一体二つの命ならずや。
見申せば土肥殿こそ。此御舟に親子一所に渡られ

候へ。御分残つて遠平をおろすか。遠平を残して
御分おるゝか。親子の内一人おりられ候へ。

シテ

「尤にて候。余りの道理に物なのたまひぞ。如何に
遠平。君よりの御淀にて有るぞ。急いで御舟より
下り候へ。

遠平

「何と御舟より下りよと仰せ候ふか。

シテ

「中々の事急いで下り候へ。

遠平

「遠平幼く候へども。君の御大事に立たん事。誰に

か劣り候ふべき。御舟よりは下りまじく候。

シテ「こざかしき事を申す者かな。君の御為父が命にては無きか。急いで御舟より下り候へ。

遠平「いや／＼君の御為父の命をば背くとも。御舟よりは下りまじく候。

シテ「言語道断の事を申すものかな。君の御為父が命をば背くとも下りまじきと申すか。其儀ならば人手には掛けまじいぞ。

義実「暫く。是は君の御門出なるに。誤りたるか実平。

シテ「何くまでも某が誤りて候。所詮おりまじきと申す者をおろさんより。某御舟より下りようずるにて候。

遠平「如何に申し候。さらば某御舟より下り候ふべし。

シテ「何と下りようずると申すか。実に／＼今こそ某が子にて候へ。あれを見よ敵大勢討ち出でたり。かまへて某が子と名のつて。尋常に討死せよ。名残

こそ惜しけれ。かくて我子をおろし置き。実平
御舟に参りけり。

地「ゆゝしく見ゆる実平かなと。互の心を思ひやり。

親子の別れ痛はしや。

遠平「父の別れは申すに及ばず。君を始め参らせて。皆
人々に御名残こそ惜しう候へ。

地「彼松浦佐用姫が。唐舟を慕ひわびて。渚にひれ伏
し、有様も。今遠平が親と子の。別れにかはらじ

と。皆涙をぞ流しける。

遠平「契り程なき早舟を。暫しとだにも言ひあへず。跡
を見送りたいゝずめば。

地「はや遠ざかる浦の波。立ち別れゆく有様を。

遠平「余の人々は心して。

地「あはれみあへる。

遠平「舟の内に。

地「実平はひたすらに。弱気を見えどとて。中々かへ

り見おきもせで。心強くも行く跡に。敵大勢見えたり。すはや遠平は討たるゝとて。頼朝もあはれみ陸を。見給へばさすが実に。恩愛の契りもたゞ今を。限りぞと思ひ実平は。磯辺に向ひ人知れず。心のまゝならば。あはれ遠平と一所に。討死せばやとあこがれて。飛び立つばかりに思子の。別れぞ哀れなりける。く。

ワキ一声

「弓張月の西の空。行くへ定めぬ舟路かな。

狂言

「沖なる波の音までも。関の声かと恐ろしや。

ワキ詞

「あれに見えたるが御座舟にてありげに候。急いで舟を漕ぎ候へ。

狂言

「畏つて候。

シテ詞

「如何に申し候。あれに兵船一艘見えて候。先こなたより詞を掛けうずるにて候。

義実

「然るべう候。

シテ

「如何にあれなる舟は誰が召されたる御舟にて候ふ

ぞ。

ワキ「我もそなたの船影を。怪しく思ひ休らふなり。そも誰人の舟やらん。

シテ「是は土肥の次郎実平が乗りたる舟候ふよ。

ワキ「何と土肥殿の御舟と候ふや。

シテ「中々の事。さて其御舟は誰が召されたる御舟にて候ふぞ。

ワキ「是こそ和田の小太郎義盛が乗りたる船候ふよ。

シテ「さては和田殿の御舟にて候ふか。

ワキ「中々の事。内々申し通ぜし如く。御味方に参らん為めに。是まで参りて候。さて君は其御舟に御坐候ふか。

シテ「和田は内々申し合はせたる事の候ふ間。唯今参りて候ふ去りながら。先たばかり心を見うずるにて候。如何に和田殿へ申し候。是までの御参りめでたう候ふさりながら。面目もなき事の候。昨日

の暮ほどより我君を見失ひ申し。かやうに浮れ舟と為つて尋ね申し候ふよ。

ワキ 「何と君は其御舟に御座なきと候ふや。

シテ 「さん候。

ワキ 「言語道断の事にて候ふ物かな。我味方をば忍び出で。月日とも頼み奉る頼朝には離れ申し。此上は命ありても何かせん。いでく自害に及ばんと。腰の刀に手を掛くる。

シテ 「あゝ暫く。君は此舟に御座候。

ワキ 「何と君は其御舟に御座候ふとや。

シテ 「中々の事。

ワキ 「さて何とてかやうには承り候ふぞ。

シテ 「是は戯言にて候。幸に陸近う候ふ程に。その舟を寄せられ候へ。御舟をも寄せ候ひて。陸にて御対面あらうずるにて候。

ワキ 「心得申し候。さらばやがて陸へ参らうずるにて候。

シテ「如何に申し候。御前にて候。

ワキ「我君を見奉りて。今は安堵仕りて候。

シテ「実にく尤にて候。

ワキ「如何に土肥殿に申し候。

シテ「何事にて候ふぞ。

ワキ「此御供の内に。何とて御子息遠平は御座候はぬぞ。

シテ「其事にて候。さる謂有つて陸に残し置きて候。

ワキ「疾くよりかくと申したくは候ひつれども。以前某

に心を尽させられ候ふ其返報に。今まではかくとも申さぬなり。いで土肥殿に引出物申さんと。隠し置きたる舟底より。遠平を引き立て見せければ。

シテ「其時実平あきれつゝ。

地「夢か現かこは如何にとて。覚えず抱き付き泣き居たり。たとへば仙家に入りし身の。半日の程に立ちかへり。七世の孫に逢ふ事の。喩へも今に知ら

れたり。く。

シテ詞「如何に義盛に申し候。さて此者をば何として召しつれられて候ふぞ。

ワキ詞「さん候是まで伴ひ申したる謂を。御前にて申し上げうずるにて候。

シテ「急いで御物語り候へ。

ワキ「さても昨日石橋山の合戦破れしかば。大場が手勢君を討ち奉らんと。大勢渚に打ち出でたりしに。

某も一所に討つて出でしが。汀を見れば。引きかねたる若武者一騎ひかへたり。某駒かけよせて見れば御子息遠平なり。急ぎ馬より飛んで下り。生捕る体にもてなし舟底に乗せ申し。是まで伴ひ参りたり。なんぼう土肥殿に義盛は忠の者にて候ふぞ。

シテ「かゝる有難き事こそ候はね。只今の御物語を聞き候ひて落涙仕りて候ふを。さぞ人々の不覚の涙と

や思し召すらんさりながら。

地

「うれし泣きの涙は。く。何か包まん唐衣。日も夕暮になりぬれば。月の盃とりぐに。

シテ

「主従ともに悦びの。

地

「心うれしき酒宴かな。

ワキ詞

「如何に実平。余りにめでたき折なれば一さし御舞ひ候へ。

シテ

「さらばそと舞はうずるにて候。

地

「心嬉しき酒宴かな。（男舞）

地

「かくて時日をめぐらさず。く。国々の兵馳せ参ずれば。程なく御勢二十万騎に。なり給ひつゝ掌に。治め給へる此君の御代の。めでたき始めも。実平正しき忠勤の道に入る。く。弓矢の家こそ久しけれ。